

高校生は仕事や職業の専門的な学習を求めている

和光中学・高校 森 下 一 期

1. 高校は青年の学びを保障しているか

現代では、90数%の子どもたちが高等学校で学んでいます。しかし、1年間に12万人を超える中退者が出るようになり、大きな社会問題ともなりました。ここ2、3年、進級制度の弾力的な取り扱いを謳った学習指導要領の実施が効を奏したか、10万名程度に減少してきてはいますが、1000名規模の高校が（1学年6学級の和光高校の全校生徒数は750名です）、1年間に100校も消えてしまう計算になるのですから大変大きな問題です。この問題は、高等学校で生徒たちは何を学ぶのか、ということと関係するところです。この青年期といわれる時期には、市民としての教養を豊かにするとともに、自分の将来の仕事・職業を選択できる力を培うときです。にもかかわらず、現在の日本の高校教育の状況は有名大学への進学（そして有名企業への就社）へ向けての受験体制に取り込まれています。それは、中学校においても同様です。そして、偏差値的な学力によって、高等学校のランクが序列化されてしまっています。職業について学ぶことのできる職業高校もこの序列に組み込まれてしまっていて、多くの場合下位に位置づけられているので学習の中味ではなく、そのランクから不本意な入学となることが少なくありません。そのような中でも、専門分野の学習に正面から

取り組ませることにより、生徒たちに学習の楽しさや意義を感じさせ、自覚的主体的な学習を引き出した職業高校の実践が少なからずあります。しかし、ほとんどは受験に役立つ教科を中心に勉強するようになっています。

現在は、高校生の74%が普通科に在籍しています。この割合からも、高校普通科の内容を検討することが大切になります。なぜなら、現実に普通科高校においては、職業に関わる教育がきわめてまれにしか行われていないからです。学校教育法は高等学校の目的に「高等普通教育及び専門教育を」施すとしています。そして、職業高校では「高等普通教育」にあたる教科目が必履修とされており、専門教育科目の必履修単位数も決められています。しかし、普通科においては専門教育科目の必修化、もしくは選択できる専門科目を必設することは決めていません。学習指導要領では「普通科においては、地域や学校の実態、生徒の特性、進路等を考慮し、必要に応じて、適切な職業に関する各教科・科目の履修の機会の確保について配慮するものとする。」としているだけです。「配慮」であって「確保しなければならない」ではありません。そして、現在は普通科高校の設置科目は学習指導要領の定める標準単位数の定められた教科・科目（いわゆる普通教育教科

といえる）で占められています。例えば、愛知県の公立普通科124校をみると、職業に関する科目が設置されていたのは——情報処理Ⅰ、簿記会計Ⅰ、計算事務、総合実践、商業経済Ⅰ、文書事務 計53講座——にすぎません。（村本邦夫「普通科高校就職指導の諸問題」『月刊高校教育』'94.7 平成4年度の実態だという）商業系の科目が3分の1位の学校に設置されているといった状態です。また、就職者数の違い見られるように、いわゆる進学校、教育困難校に序列化されていることが一覧表に示されています。就職者の多い学校に職業に関する科目が設置されていることが想像されます。

このように、高校普通科においては受験のための科目を学ぶようになっており、進路指導は結局は進学指導になってしまっています。そのような中で、偏差値的な学力に振り分けられた子どもたちは、その競争に勝ってきたものたちはその先の展望を持ってさらなる競争に役立つ教科の学習に励むこととなりますが、振り落とされたものは競争に見切りをつけ、ただ、高卒の資格を得るために勉強することとなっています。しかし、当然その競争からもはみ出されるものもいます。高校普通科はいわゆる進学校を除けば学習の意義を見いだせない生徒が多くなることとなります。このように、普通科高校に学ぶ、少なからぬ（3%のエリートの養成がいわれた時期があったが、それからするなら、大多数の）生徒が設定された競争から脱落させられ、本来学ぶことができ、また、学ぶべき事柄を学べずに置かれているのです。そのように考えてい

くと、普通科高校をどう作り変えていくかが焦眉の問題であることがわかります。

2. 和光高校では専門教育を教えたい

このような問題意識にたって、和光高校ではカリキュラム改革に取り組んできています。その改革の柱の一つが普通高校の中に専門教育科目を設置することです。

私たちは高等学校で生徒が学ぶ内容は、『現実世界と切り結ぶ』ものを基本とするべきであると考えています。さらに、青年期の教育は『進路選択できる力』を育てるという目標も明確にしました。そういった視点で考えると、現実世界というとき、職業的世界も重要な場です。また、進路を考える際、職業分野について知ることは不可欠です。とはいえ、和光高校の現実を見るなら、卒業後すぐ職業に就くものはほとんどいません。就きたい職業がはっきりしていても、専門学校等での学習を継続するケースが多いといえます。その一方で、大学への進学希望者も多い。このような場合の職業に関する教育はどうあるべきかが検討の課題です。

専門学校で学ぶにせよ、大学で学ぶにせよ、自分が目指すものについての具体的な像が描けているかどうか。その前に、目指すものをはっきりつかんでいるかどうかの問題です。その目指すものを具体像をもってつかみ取ることが出来るような場としてこの専門教育科目群を考えようとした。つまり、即、職業に就くために必要な知識・技能を付与する、というよりも、その分野の知識・技能の学習を通して、その職業についての具体的像をつかむ場とした

らどうかと考えたわけです。短大なり、大学卒業でなければ資格を得られない分野についても、その基本を学ぶことが考えられます。保育、教育、福祉などの分野はそれにあたるでしょう。この間、和光で実践してきた国語、理科、社会、数学、英語などでの専門的な学習をめざす科目もそれにあたるといえます。

要約すると、生徒が現実存在し、自分がたずさわるかもしれない職業や専門分野についてのイメージを、知識や技能の学習を通して得ることのできる場という特徴をもたせた選択枠にすることができないだろうか考えたわけです。

3. 生徒が期待するもの

このような専門教育科目を3年生に設置するために準備を重ねていますが、来年度96年度には実施しなければなりません。そこで重要になるのが生徒がどのように受け止めるかです。どのような科目を設けるかも生徒の要望を踏まえる必要があります。そうしたことから、この一学期にアンケートを実施しました。（カリキュラムや授業科目に生徒の意見を反映させる必要があると考えてきていることも、私たちの重要な取り組みととらえています）

上記のような専門教育科目設定の主旨をB5一枚にまとめ、B4の紙の左に印刷し、右に設定予定の科目を書いて、「関心のある講座に3つ以内○をつけて下さい」というアンケートをとりました。この用紙とは別に、それぞれの科目の概要を200字程度書いたプリントを用意しました。2年生については「専門教育科目」の選択枠に入

れてほしい科目を自由に書いてもらうことにしました。その結果が下記の表です。3年生は、来年は卒業していますから、意見を聞くという形でしたが、2年生と同様かなり多くの科目に関心を持っていることが伺えます。

科目名	二年生			三年生
	男子	女子	合計	合計
都市と自然と調査	10	6	16	10
野外活動演習	19	14	33	20
スポーツ・ウォーキング演習	15	7	22	8
民舞	1	1	2	13
保育・教育	7	24	31	32
インターネットコミュニケーション	10	24	34	33
コンピュータ制御	24	7	31	19
専門調理演習	22	33	55	30
木工芸	8	7	15	19
文字デザイン	3	12	15	20
日本の芸能	13	3	16	16
フラワーアレンジメント	3	22	25	31
映像実習	25	32	57	63
司書・学芸員	4	7	11	15
調査・発表の技法	5	4	9	10
ボランティア論	6	6	12	31
マーケティング	11	5	16	11
カウンセリング、カウンセラー	10	30	40	23
看護・福祉	1	21	22	31
マスコミとジャーナリズム	19	19	38	31
合計	216	284	500	466
提出人数	81	109	190	180

（実施はこの中の12～13科目を予定している）

この専門教育科目は、新しい学習指導要領の実施に伴うカリキュラムとして、昨年度に決定しているものです。（この段階では、カリキュラムに関して生徒の意見を反映させようという合意は教員間では得られていませんでした）ですから、前記したように、どのような科目を希望するかという形でアンケートをとったわけです。

でも、3年生は旧のカリキュラムで学んできたのですから、本来は関係ないと言えます。ただ、私たちとしても、生徒はどのようにとらえるか、大変気になるところで

したので、これまでの和光高校の選択科目と比較する意味も込めて、次のような問いかけをしました。

「1年～3年に経験した選択科目についての意見を書いて下さい。」「その他の要望」といったもので、関心のある科目の希望は2年生と同じです。

これらの設問は、正面から「専門教育科目」の是非について問いかけたわけではありませんが、生徒たちは和光高校のこれまでの選択科目の学習と対比し感想や意見を述べています。

一方では、「専門学校進学率を上げるつもりなのですか？興味本位の内実のない学習になるのではないですか？大学（外部）進学希望者には何もないのですか？」と疑問や反発を示す意見もありますが、他方で、「専門教育科目は絶対ある方がいい。」といった考えを書く生徒も多くいます。

先に書きましたように、問いかけが異なるため、はっきりした数字を出すことはできませんが、大まかに分類すると、

- ① 専門分野などを学べる選択科目を多数設置することに肯定的——87名
 - ② 大学受験などを考えるとじゃまな学習となるので反対——8名
 - ③ 賛否はかかれず、和光の選択科目についての感想を書いている——65名
- といったところです。

確かに、②の反対を主張し、「必修選択にしない方がいい。外を受験する人のじゃまをしないでほしい。今も和光は外を受験する人にとって不利なのにこれじゃあ本当に最低な高校になってしまう。頭悪いと思う。自己満足だと思う（先生たちの）」と

いう生徒もいますが、①の賛成の立場から、「もっと早くやってよね!!」「私たちの年代からかわってほしかった。本当にうらやましい。とても楽しそう。」という生徒が圧倒的に多いのです。そういった生徒たちの言葉を紹介しておきたいと思います。

- ・「私たちが選べないのに、こういうアンケートに答えるのは悔しい。私たちのときもあれば……という科目が沢山あった。」
 - ・「せっかく専門的教育科目を設置するのなら、高等普通教育の先生を適当に当てはめるのではなくて、ちゃんと教える人も専門の人にする必要があると思う。」
 - ・「進路を考えた上で“とりたい”と思う選択科目が少ないと思っていたので、下記のように増やすのはよいことだと思う。英国数社理の分野のなか以外で学びたいことを入れるべき。」
 - ・「全然やりたいものがないという選択ではなかったが、今回のような専門科目というものをつくって欲しかった。」
 - ・「べつだん不満はなかったけど、下の科目を見るとうらやましい。ちょっと貧弱だった気がしてくる。」
 - ・「下のような授業あれば大学の学部を考えるのにか役だったと思うのに。」
- 「専門学校のような高校ってゆうのもいいのではないのでしょうか。」
- ・「下のような講座があったら、うれしかったと思います。」
 - ・「内容を、もっとこれから役立つものにした方がよく思う。選択ならもっと専門的な内容で、きちんとこなせるようにした方がいい。ずるい。」
 - ・「司書・学芸員あったらやりたかった。命かけてやるのに、くやしige。」
 - ・「経営論とか、簿記について、商業高校みたいな授業を和光でもつくってほしい。」